校長室だより～燦燦～ №４１０

最高の日本語

2021.8.20

国語の授業を担当してきたので、中学校の国語の教科書だけでなく小学校の国語の教科書も見ることがある。小学１年生と２年生の教科書を見て思うことがある。「子どもたちは、もっとできるんじゃないか。教員が勝手にできないものと決めつけてはいないか」

今の子どもたちは、学校の国語の教科書に書かれていることよりも、もっとレベルの高い国語を望んでいるように思う。小学校低学年の授業を見ていると、子どもたちは、「そんなのわかる」「もっとできる」と訴えているように思う。

子どもたちは、情報化社会に生きているせいか、大人たちが考えるよりも非常に吸収力が高い。膨大な情報に接している子どもたちには､今の学校の教科書だけでは物足りないのではなかろうか。国語の教科書を、もっと進化させてもいいのではないか。

小学１年生の時期が重要である。小学１年生で何と出会うか。そのときに、本物の日本語、レベルの高い日本語を学ぶことが大切である。ぜひ、最高の日本語を子どもに与えたいものである。最高のものには、子どもの心を惹きつける力がある。

『ごんぎつね』『走れメロス』『坊っちゃん』『星の王子さま』『論語』そして、松尾芭蕉や小林一茶の俳句、百人一首などは、子どもたちの読解力や考える力、生きる力を育てる名作・名文と言える。

小学生には難しいのではないかと感じるものもあるかもしれない。しかし、江戸時代には、子どもが漢文を読むのが当たり前だったことを考えると、どうなのであろうか。漢字の指導についても以前から気になることがある。学年ごとに漢字配当表があるため、書くのは配当表にあるものだけでいいかもしれない。一方、読む方はというと、ふり仮名をつければ、難しい漢字でも読むことはできる。漢字で書いているほうが、かえってわかりやすい場合もある。上の学年で学習するような漢字でも、ふり仮名をつけて読むだけはできるようにした方がいいのではないか。

小学校の授業を見ていると、子どもたちから「先生、その漢字はまだ習っていません」などという発言が飛び出すことがある。愚の骨頂である。

今後、世界は本格的なＡＩ（人工知能）時代に突入していく。その時に最も大事な能力の一つは読解力だと言われている。文章を読み、正しく理解する力である。この力がないと、これからの社会を生きる上で苦労をすることになるであろう。

読解力の根本となるものは、語彙力である。どれだけ多くの言葉を知っているか。漢字をしっかり読めるか。それが問われる。早いに越したことはない。多少難しく感じても、楽しみながら勢いで乗り切るべきである。勢いというのは大事である。

小学校１年生のときに、言葉というものが好きになれば、国語に関しては一生涯苦労することはないかもしれない。

さて、中学生はどうするのか。まだまだ名作・名文に触れるチャンスはある。中学生に最適なものを提供し、最適な学びを保障してあげることが必要である。中学生にとっての最高の日本語というものがあるはずである。